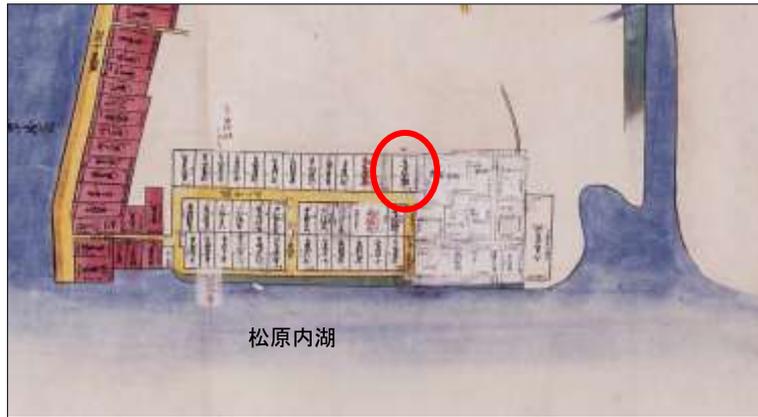


かこ 旧彦根藩水主屋敷（水主小頭・旧磯崎家住宅）

彦根藩には船奉行の配下に水主衆みなぬししゅうがあり、平時には船小屋番舟役ふねこやばんふねやくとして松原湊まつばらみなとに詰め、有事には船奉行に従って水軍すいぐんを構成しました。水主衆の人員は、承応3年(1654)の55人を初見に、2代井伊直孝いのあたか代50人、3代直澄なおすみ代30人、4代直興なおおき代40人と時期によって増減がありました。彼らは「御水主小頭おんかここがしら」2人、「同加役かやく」2人、「元目役もとめやく」1人、「御召船乗役おめしふなのりやく」2人、「同手代り役てがわりやく」4人、そして「平御水主ひらおんかこ」などの職務を与えられ、松原内湖に面した地所に集住して水主町を形成しました。

水主町は、現在も南北方向に走る2間の道路に沿って短冊型はなむすびがたに区画された屋敷が整然と3列に並んでおり、敷地の間口は4間、奥行は8間を標準としています。主屋の形式は、切妻造り瓦葺妻入りきりつまづくかわらぶきつまいりと入母屋造り草葺妻入りいりもやづくりくさぶきつまいりがあり、主屋は間口3間半、奥行6間の例が多く、平面構成は前面に土間どまをとり、床部分を田の字型に仕切っています。また、主屋の前面または背面に土蔵を設けた例が多く存在します。



「御城下惣絵図」に描かれた水主町と旧磯崎家住宅(O印)

旧磯崎家住宅は、旧水主町の北西隅に位置しています。水主町の主屋は直接道路に接しているのが通例ですが、旧磯崎家住宅は道路に面して木戸門きどもんと目板瓦葺きの塀へいを構え、その奥に主屋を配置する武家屋敷構造となっています。これは、旧磯崎家が水主小頭を勤めていたことに関連するものと考えられます。主屋は、間口4間、奥行き3間で、その西側に間口2間半、奥行き3間半の座敷棟が付属し、主屋北側に台所棟、南側に水回り棟（旧雑小屋）が付設されています。座敷棟の南には土蔵が1棟存在します。また、主屋北端には、近年、2間×5間半強の増築棟が増築されました。



旧磯崎家住宅外観

主屋の平面構成は、東側の道路に接して門が開き、「おもてのにわ」「さんじょうのみ」と続き、その北には「だいどころ」と「いたのみ」があります。水回り棟には、便所、風呂、洗面所、物置部屋を配し、奥に「よじょうはんのみ」があります。座敷棟には「なかのみ」と「ざしき」があり、長押ながしを廻し欄間まわらんまを配しています。「ざしき」は9畳で、床の間を備え、廊下側に仏間を設けています。「なかのみ」には押入が付設されています。増築棟には物置、寝室、居間があります。

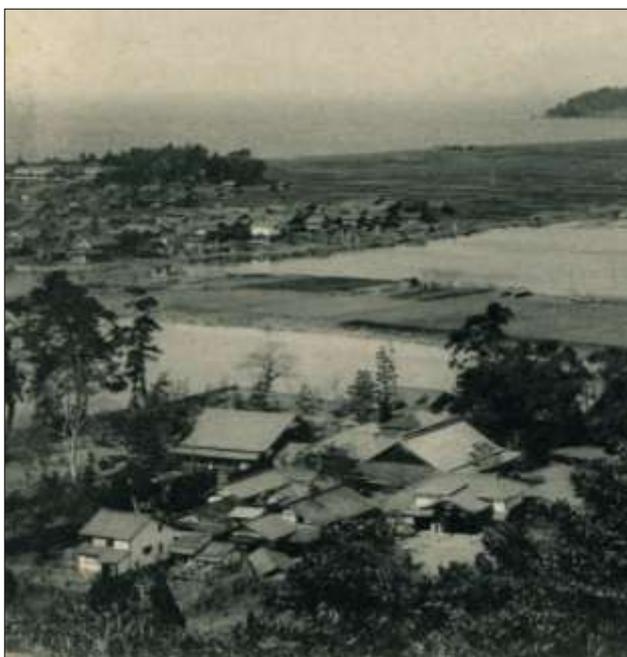
旧磯崎家には建物配置を記した「家相図かそうず」が残っており、現在の主屋、座敷棟、台所棟、水回り棟（雑小屋）の各棟が天保14年(1843)に建てられたと推定されます。その後、道路に沿って門と塀が設けられ、幾度

かの増改築を重ねて現在に至っています。

水主町は、彦根藩の水主衆が集住した町であり、今日でも往時の景観を比較的良好に残す地区です。中でも旧磯崎家住宅は、水主小頭の役職にあった江戸時代後期の姿を留めており、同家に伝来した4535点に登る古文書資料（彦根城博物館寄贈）とともに、彦根藩の水主衆に関する調査研究にも大きく寄与する歴史的建造物です。



「玄宮園外図」に描かれた水主町



古写真に写る水主町
(手前の建物は楽々園)